

「終電がない」だけでは説明のつかないJ君の義理 堅さ（異文化言い分EVEN）

著者	岡部 正義
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	232
ページ	52-52
発行年	2015-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003306

「終電がない」だけでは 説明のつかない「君の 義理堅さ」

岡部正義

台風が相次いで日本を襲撃した昨年九月下旬、フィリピン行きを計画していた。しかし、運悪く出発当日にフィリピン東方沖に台風が渦巻いていた。フライトはお決まりのように遅延し、ニノイ・アキノ国際空港（NAIA）着陸時にはジェットコースターの滑降さながらの乱高下を繰り返し、恐ろしい思いでマニラに着いた。NAIAを出た途端、空港の自動ドアの前を滝のような水が直下している。ロータリーはすでに川のように冠水し、迎えの車に飛び乗るも両側にアーチ状に水をかき上げながらゴォーとにぶい音を立てて走っていく。「ははは、とんでもないときに来ちゃいましたね」と運転手さんも苦笑い。久しぶりに現地の友人たちと一緒に行くことが目的のひとつにあったが、この台風こそがその再会をあわや切り裂こうとしたのである。

予定では、到着した日（金曜日）の翌日に友人たちの集落へ行く約束だった。以前に訪れたときはハイスクール生だった少年少女もいまや大学生や社会人となっている。土曜日ならば学校や仕事で休みだから会うのに打ってつけだったが、台風により金曜日に多くの学校や仕事で休みとなった。そのため、翌日の土曜日に振替

えとなるケースが少なくないようだった。

約束の土曜日、風雨はおさまり、曇天ながらもマニラ市内をなんとか移動できるようになった。しかし、多くの友人たちが「ごめんなさい、今日は仕事（学校）に行かなくちゃいけないから日中は帰ってこれないんだ」とメールで報せてきてくれた。私もその日は夕方にはその地を出発して別の目的地に向かわなければならなかった。結局、訪問時にはわずか一人の男の子としか会えず、「他のみんなは仕事や授業に行ってるよ…。」と彼も残念そうだった。その「みんな」のなかには、親友J君も入っていた。

J君は前回の五年前の訪問時に意気投合し、将来の夢やお互いの国のことを語り合ったナイスガイ。彼は私をbrotherとかmy best friendと呼んでくれている。フィリピン人はしめつけさもなくこういうことが言えてしまうから感心する。もちろんリップ・サービスの部分があることはさっ引いても素直に嬉しい。とにかく、フィリピンに足を運んだからにはまずJ君と顔を合わさなければと私は思っていた。しかし、ついに土曜日にJ君と再会が果たせなかった。

未練がありつつもこの集落を後にし、次の目的地訪問も終え、ホテルに戻った夜、携帯電話に「今日は会えずに残念だったよ！明日は何時に出かけるの？ホテルはどこ？」とJ君からメールが来た。ホテルの場所と、翌日（日曜日）は朝九時くらいにはまた別の目的地に出かける予定だということ返信した。「そこは僕の職

場から近いホテルだ！じゃあ明日の朝四時に行けば、会えるね?!」朝の四時とはなんとも日本ではあり得ない時間設定である。「おいおい、四時にここまで来られるのか」と訊ねれば、「フィリピン人をなめてもらっちゃこまるね。ジープニーに乗れば終電なんて関係ないのさ」と得意げな返信が来た。フィリピンは高架鉄道の終電は早い（夜九時）。しかし、ジープニーという乗り合いタクシーが町には縦横に走っていて、これが庶民の足となっている。ジープニーには終電なんていう感覚はないのである。

彼は翌日、約束した時間より早く、朝四時の半時間前にすでにホテルに到着し、私にモーニングコールまでする周到さだった。きっと彼は夜中の二時には目を覚まし、家を出ていたのだろう。旧交を温め、話に花を咲かせていると、彼は急に「頭が痛い」と言い出した。「はは、早起きしすぎたからだ。少し部屋で寝かせてもらえるかな」彼はまるで大仕事を終えて安堵したかのように私の部屋のベッドに崩れた。

一目でいいから日本から来た知己に会おうと、夜中に眠たい目と仕事で疲れた体を押しして深夜にジープニーを乗り継ぎながら飛んできてくれた姿が彼の寝顔を通して浮かんできた。フィリピン人の心優しく義理堅い気質はフィリピン・ホスピタリティとして知られているところであるが、今回の一件は、「終電がないから」だけでは決して済まされない大いなるフィリピン・ホスピタリティを感じさせてくれた。そんなエピソードがまたひとつ増え、またこの国を好きになった。

（おかげ、まさよし／アジア経済研究所 研究支援部）